

3. 八百津発電所の建設と地域社会

山間にある河川のエネルギーを活用する水力発電所の建設は、市街地に立地して近辺に電灯用電力を供給する火力発電所とは違い、ほとんどの場合、建設地の地元の要求に端を発するものではなく、遠隔の地にある需要地に電力を供給することをめざしている。それにもかかわらず、あるいはそれ故にというべきか、水力発電所の建設は、多くの点で地域社会の利害と関連し合う。一般に多くみられるのは、ダム式水力発電所建設に伴う若干の地域の水没、農業水利権との関連、明治期までにみられた事例でいえば河川利用の物資輸送との関連などである。この関連とは、しばしば矛盾あるいは利害の衝突であった。

木曾川水系の場合は、ことに八百津発電所の建設が課題となった時期には、かりにダム式水力発電所を採用したとしても、地域の水没や農業水利権との関連はほとんど問題にならなかったと考えられる。しかし、道路網、道路による輸送手段が旧来のままであり、鉄道建設がようやく始まったばかりの明治期には、河川を利用する物資輸送との関連は無視できない問題であった。この点では、木曾川が古く近世初頭以来、木曾の奥山で伐採された材木を大量に流下する輸送路として、また下流地域から上流地域へ生活物資などを輸送する経路として活用されていたこと、明治初期になってからは、夏期は物資の輸送に冬期は材木の流下に活用するという方式で、両者の矛盾が調整されていたことなどは無視できない。この事情は明治末期においても基本的に変化していなかった。

ことに八百津発電所が建設された土地の対岸にあたる錦織綱場は、木曾川上流からばらばらに流してきた大量の木材を一旦すべて留置し、その木材をここで筏に組み直して、2人の職人が乗って下流まで筏のかたちで搬送する重要な中継基地となっていた。（いわゆる「木曾のなかのりさん」とは、この筏師をさしていた。） 鉄道（中央線）が次第にのび、また森林鉄道が敷設されるなど木材輸送、物資輸送がこれらに替わりつつあったとはいえ、その多くは八百津発電所建設の後のことに属し、八百津発電所建設の当時はなお活発に活動しており、これにより生計を営んでいた人びとが八百津町にも少なくなかったことは銘記されるべきである。当地が物資輸送の基地であったことは、八百津橋付近に当時の常夜灯が現在も残されていることから推測できる。

八百津発電所が水路式を採用して建設されたことは、これらの諸問題との矛盾の顕在化を回避したことを意味する。

この綱場（綱を張って流下してくる木材を留置したのでこの名がある）は、十数年後の大正13年に上流に大井ダムの建設が完成したことにより、地元民との多少の紛争を含む折衝を経て、同15年に廃止された。

ちなみに地元への電力供給の問題についていえば、八百津発電所の場合には、その建設に先立って工事に必要とする動力を供給するために水路式の小規模な工事用発電所が作られ、八百津発電所の完成後の大正元年10年にこれを八百津町が買収して町営旅足川（たびそこがわ）発電所とした。これにより初めて地元へ電力が供給されるようになった。